春色リバース

他界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
春色リバース

【Ｎコード】
Ｎ１２３９Ａ

【作者名】
他界

【あらすじ】
伊藤一（いとうはじめ）と三沢春香（みさわはるか）。リバース部で活動している数少ない部員である。一は春香に恋心を抱きながら、しかしそれを表に出せないまま、今日もただリバースを続ける…。

伊藤一（いとうはじめ）。高校二年生で、誰とでも打ち解けるが親友と呼べる友はおらず、顔も悪くはないがいいともいえない。中肉中背で、服装も髪型もいたって普通。『普通』という言葉にすべてが凝縮されているような、そんな男だ。

普通じゃないことといえば、リバース部なる部活に毎日顔を出していることだ。リバース、要するにオセロをひたすらやり続けるだけの部活である。実のところそんな部活でも、所属部員数はこの高校では野球部やサッカー部と肩を並べる。だが、実際に顔を出しているのは彼を含めて二人だけ。部活に属することが義務付けられている学校で、帰宅部の代名詞となっている部なのだ。

それでも二人いればオセロは出来る。一は黒い石を適当に打って、対戦相手の顔を伺った。

ショートカットの似合う少女だ。顔立ちも整っていて、顔や体の輪郭もすらりとしている。すんなりと美少女と呼ぶことができる人物だ。明るくて誰にでも分け隔てなく接する性格が、外見からも読み取れる。

三沢春香（みさわはるか）という名で、校内でもそれなりに人気のある女子生徒だ。漫画によくあるような全校生徒の憧れの的ではないが、彼女に恋心を抱いている生徒が数人は必ずいるであろう。そんな少女である。

一が正直それほど好きなわけではないオセロを一年以上やり続けている理由も、彼女が好きだから、という単純というか不純というか、わかりやすく納得できる理由である。帰宅部のつもりで入ったリバース部で春香に一目惚れして、帰宅して暇を持て余す人生設計を書き直してこうしてオセロに励んでいる、というわけだ。

純粋にオセロが好きな春香にしてみれば、リバース部が帰宅部の代名詞であることは不本意だっただろうが、彼にしてみれば絶好のチャンスといえた。真面目に顔を出す部員を、彼は自分と春香以外

に知らなかった。部長は三年生の男子が引き受けていたが、一は顔も名前も思い出せない。顧問すら、年の初めに顔を出して「参加は自由だから」と帰宅を促す発言をしただけだ。つまり誰からも不自然に思われずに二人っきりで過ごせる、夢のような部活なのだ。

しかし一年以上もこうしてオセロを打ち合っているが、一はまだ自分の思いを伝えていなかった。最初の頃は純粋に部活で会うと嬉しくて有頂天になったが、しかし一年生の秋くらいから彼女が彼をそういう対象として見ていないことに気づき、告白してもＯＫが出る確率が低いことに傷つきながらも、いつか振り向いてくれるかもと思いながら二年生の春を迎えてしまった。

少し悩んでいた春香が白い石を打った。何も考えずに置いた黒い石があっけなく三枚奪われてしまった。

「うーん。やられたか…」

よくある場面である。春香目当ての一と、好きでやっている春香では、当然春香のほうが強い。実際のところ春香は下手の横好きなのだが、それでも一よりは強かった。

「甘いわよ。もっと先を読んで布石を置かな…ああ待って！　そんな殺生な！」

またも考えなしに置いた黒石が、春香の石を一枚だけめくった。考えなしに置いた石だが、意外と大きな意味を持っていたようである。

盤を見てみる。一から見て左下を狙うように配置した春香の布石を睨むように、黒い石が置かれている。下手なことをしなければ、春香の手をことごとく返り討ちに出来る位置だ。ここからなら逆転できるかもしれない、とようやく一は少しだけ戦略を練ってみた。

苦し紛れの春香の手を封殺して、戦術的な布石を潰していく。現状では白の方が多いが、終盤になると次第に黒が勢力を増していくはず。

綺麗な眉をひそめながら春香が悩んでいる。本気で考えているのか、貧乏ゆすりを初めて少し机が揺れる。貧乏ゆすりをし始めるの

は、悔しさと歯がゆさを感じているときの彼女の癖だと、一年以上の付き合いでなんとなくわかっていた。
「さあ、どうするのかなぁ？」
わざと嫌味な感じに言ってみる。春香は僕の顔を睨んで比喩ではなく頬を膨らませたが、すぐに頭を振って盤に集中した。そのしぐさが可愛くて、勝てそうなときはついついからかってしまう。冗談だとわかる口調で言っているので、きっと嫌われてないと思いたい。
「えーい、ここならどう！」
「残念でした」
三分考えて打ってきた春香の手を三秒で返り討ちにする。
「えー、そんなぁ…」
「春香ちゃんって、直球勝負でくるよな」
「え、そう？　うーん、でもそうかもね。次の手が読まれてるし」
素直な性格というか、損な性格というか。そんなところも可愛いのだが、と一は心の中でのろけた。
基本的に春香はわかりやすい手を打ってくる。きっとオセロの攻略読本みたいなものを読めば、中級者編あたりに春香の常套手段が載っている。いい手には違いないのだが、読みやすいので対策を立てやすいのだ。
それに対して一は、基本的に何も考えない。打てるところに打っていく、という手法なので、運がよければ勝てるし、運が悪ければ負ける。初心者丸出しである。
しかし彼が本気を出した場合、相手の出方に対してカウンターを仕掛けるのが得意な戦術だ。そういう意味では春香はやりやすい相手といえる。もっとも、相手が春香だからカウンターが得意になるのかもしれないが。
オセロも恋愛ももっと積極的だったらなぁ、と彼は思う。積極的に出ることが出来たなら、とうの昔に告白できていただろう。たぶん振られていたけど、とも思ってしまうが、このままだらだらと卒業までこんな感じなのだろうか、という懸念よりはマシだろう。

それに、オセロが積極的だったら、きっと春香に勝ってしまう。一に才能があるとかではなく、春香が下手だから。中級者くらいになれば、きっと春香は弱く感じるだろう。今くらいの弱弱な二人のほうが、きっと楽しめる。

「隙あり」

考えていると、春香が難しいところに打ってきた。

「むむ…」

「えへへ、いいところでしょ」

「うん。これは一本取られたな」

自慢げに笑う春香に、一は素直に頷いた。

「うーん…ここならどうだ？」

「え？　きゃぁ！　そこはダメぇ！」

縦一列。厳密にはそういう手があるのでこの表現は違うのだが、とにかく縦一列の白を一気に五枚奪う。斜めにも三枚奪えた。壁に面したところなので次の手に困ってしまう場面だが、黒数を稼ぐにはいいだろう。

もう終盤に差し掛かっている。勢いは一にあるが、まだ白の方が多いので、そろそろ一気にひっくり返していかないと逆転が間に合わない。

「なんというか、春香ちゃん、ザルだよね」

「そうかな？」

「直球勝負で、しかも自分のことを見てない」

「…？」

「うーん…たまにスカートの端、ドアに挟まない？」

「うっ」

図星だったようだ。ザルというよりはドジといったほうがわかりやすいかもしれない。まっすぐに前を見ているのは尊敬できるのだが、足元や自分を見ていない。

「街を歩いてると、何もないところで転んだり」

「ううっ」

「キャッチセールスに五分くらい捕まったり」
「ううううっ」
一は少しだけ春香の未来を心配した。前から少し鈍いところはあったが、結構重症かもしれない。まあ、小動物のようで可愛らしいのだが。
「一緒に街を歩いたら、ただそれだけで笑えそうだな」
「う、いいでしょ、今は私のことは！」
怒ったように春香は石を打った。これが怒りの力だ、といわんばかりに五枚近く黒が裏返っていく。
少しだけ、しかし本気で一は悩んだ。
この手はおそらく、怒って平常心を失った状態で打った手だ。確かに白の数は増えたが、発展性のない手である。カウンターが面白いように決まる手でもある。考えるまでもなく反撃の手が思いついた。だが、彼は勝ちたいわけではない。オセロそのものはどうでもよく、ただ春香と会話するのが楽しみなのだ。ここで心の隙をついて勝ってしまうと、すごい不興を買うことになるだろう。とはいえわざと手を抜くというのは、見るからに正々堂々を好むタイプの春香には耐え難い行為だろう。
どうしたものか…と思いながら、考えがまとまらないままに手を打つ。結果、かなりおざなりな手となってしまった。
「むぅ…わざと？」
対戦相手にそう言われてしまうくらいおざなりだ。
「いや、わざとじゃないんだけど…迷いが形になった」
「…？」
戦術も何もない手を、春香が一気に押し返してくる。白の勢いが黒を押し流しかけている。たぶんこのままでは負けてしまうが、手を抜いたと思われるのは心外だ。ここから勝ちに行ける手を一は本気を出して考え始めた。流れを変えるために、終盤だが一手を布石に使う。
「でもそうね。よく友達に言われる。『春香と歩くと心配でしょう

がない』って」
「だろうなぁ」
「どうせ私はドジくさいわよぉっだ」
「まあそれも可愛いけど」
「へ？」
言ってから後悔した。本音が漏れてしまった。あわてて弁解する。
「ほら、なんていうか、そういうのが許されるタイプっていうのかな。ドジってもウザいだけの奴もいるけど、春香ちゃんは自然に許されるタイプなんだよ」
「うーん？　そうなのかなぁ？」
「うんうんそうだよ。可愛い子は得なんだよ」
「…おだてても手は抜かないわよ！」
もう、と顔を膨らませて容赦のない手を打ってくる。一はちぇっと舌打ちをした。手を抜いてもらえないことに、ではない。おどけて逃げてしまう自分に、だ。真顔で「可愛い」とか言えるほど、彼は場慣れしていなかった。たぶんこんなだから、告白の一つもできないのだ。
自己嫌悪を感じながら手を打つ。容赦のない春香の手を封殺して、逆に自分に有利に変えてしまう。
「でもまあ、別にそんなに悪いことじゃないと思うけど。ドジなところも春香ちゃんらしさだからさ」
「それって喜んでいいの…？」
「うん。俺だって単純馬鹿なところあるし、人間弱点はあるもんだって」
適当なことを言って彼は最後の石を打った。一気に白が裏返って黒の陣地が増える。
６４マス全てが埋まって、ゲームエンドだ。二人で自分の色を数え始める。
「えーと…３１かな」
「私３３だったよ」

紙一重で一の負けだ。元々勝つつもりがなかった彼にしてみれば、互角とはなかなか善戦したといえるだろう。
「へへー。私の勝ちだね」
「そうだな。惜しかったんだけど、やっぱ負けちゃったか」
一は悔しそうな顔をして、嘘をついた。喜んでいる春香の笑顔を見ていれば、負けて惜しいなど微塵も思わなかった。むしろ負けてよかった。
二人で３２枚ずつ、石を集める。携帯のディスプレイを見ると『ＰＭ０４：２１』と表示されている。顧問も部長もいないので、ここで終わりにしてもいいし、もう一戦交えてもいい。一応六時までに下校することが生徒全体に義務付けられているので、それまで延々と打ち合っていても構わないわけだ。
「どうする？」
春香へと目を戻して問いかける。一としては春香が乗り気じゃないのにあえてやろうとするほどオセロが好きなわけではない。だが春香がやりたいと思うのなら、気の済むまで付き合ってあげたいし、その方が長く一緒にいられる。結局春香が部の全てを握っているようなものだ。
「なんだったらここでやめて、帰りにどこか寄ってかない？」
と、一はなけなしの勇気を出して言ってみた。話で街のことが出たのだから、あまり不自然ではない、と思う。
「やだよー…どうせドジったら笑うつもりなんでしょ？」
…話の流れは味方ではなかったようだ。
「笑わないって、絶対。約束する」
「…笑う人はみんなそういうんだよ」
信用ないなぁ、と一は心の中で傷ついたが、あまり信用を得られるようなことをしていないのも確かだ。からかったときに拗ねる顔とか、怒ってむくれている顔とか、可愛いのでよくからかってしまう。
男というのは好きな子はいじめたくなるのだ。これは人類が誕生

したときから遺伝子に組み込まれた衝動なので、一介の高校生にはどうしようもない…と言い訳してみても、やってしまうものは仕方がない。
無理に誘うのはあきらめて、
「じゃあどうしよう？　もう一戦やろうか？」
そう言うことしか出来なかった。
少し悩んで春香も自分の携帯の時計を見た。
「…まだ時間あるし、もう一回だけやってこうか」
「ＯＫ」
お互い二枚の石を中央に置く。一はポケットから一円玉を取り出した。親指で回転を加えながら真上に弾いて、落ちてきたところを素早くもう片手で蓋をする。
「表か裏か？」
「うーん。さっき表選んだから、今度は裏にしてみる」
手をどけてみると、一円玉は裏を上にしていた。
「じゃあ私黒ね」
つまり彼女が後攻ということだ。オセロは後攻が有利だといわれているが、一はそんなことは気にしていないので、正直コインで決めるまでもないのだが、一応やっておかないと春香が納得しない。そういうところも素直というか、真面目なのだ。
先攻の白。さっきと逆になったわけだ。さっきは有利な後攻で負けたのだから、先攻になったら勝ち目は少なそうだ。
適当なところに置いて春香の手になる。
「でもさ」
序盤の展開や布石を考えているのか、石を打たずに春香は口を開いた。
「伊藤くん、だいぶ強くなったよね」
「え？　そうか？」
「うん。初めの頃は、ただ多くめくれるように打ってただけじゃない？　今は何手か先まで読んで打ってるでしょ」

「えー？　そうでもないぞ」
口ではそういったが、彼は春香の眼力に舌を巻いた。確かにそういうことも出来るようになってきたが、考えるのは苦手なので基本的に考えなしに打つ。せいぜい一手先を読むくらいで、勝つよりもゲームを引き立たせるような打ち方をする。だから彼の力量というのはほとんど表に出ない。一自身でもどれほどのものかわからないくらいだ。それを見抜くとしたら大したものである。
まあ一年以上二人で打ち合っていれば、さすがにわかるのかもしれない。
「でも強くなっても仕方ないしね」
あまりに強くなって春香と勝負にならなくなったりしたら、オセロをやる意味がなくなってしまう。どころか彼女と二人っきりになる機会が減ってしまうかもしれない。それくらいなら弱いままでいい。
「なんで？」
と真顔で聞かれても、そういう理由を彼女に言えるわけがない。
「えっと、ほら。大会とかないし」
「一応オセロにも大会とかあるんだよ、って前言わなかったっけ？」
「いやそうだけど…。あ、それに、俺の近くじゃオセロやる友達って、春香ちゃんくらいしかいないからさ」
「何それ。やっぱり私じゃ相手にならないって？」
「いやいやいや！　そうじゃなくって…えーとなんていうか」
くすくす、と突然春香が笑い出した。首をかしげて一が彼女を見つめると、彼女は「ごめんごめん」と笑いながら謝った。
「ふふ…妙に慌ててるんだもん。面白い」
「面白いって…うーん？」
「でもまあ、楽しくやるのに理由なんかないわよね」
首をかしげていると彼女は勝手に納得したようだった。
「そうそう。楽しくできれば、強くなくてもいいかなぁって」
そういうことにしておく。

「でも惜しいなぁ。きっと私なんかよりずっと強くなると思うのに」
「それはいいすぎだよ。強くなったとしても、春香ちゃんよりちょっと強いくらいさ」
「あら、もう私に勝ったつもりなんだ？」
「今でもたまに勝てるから、きっと修行とかしたらもっと勝てるようになるかもよ？」
　笑いながら一はそう言ってみた。オセロの修行ってどんなものか、彼には想像つかないが、たぶんそれほど強くはならないだろう。オセロが楽しいわけではなく、春香と過ごすから楽しいのだ。そんな不純な動機では強くなれまい。
　だがそんな冗談に火がついたのか、春香は言い募った。
「これでもオセロ暦は長いんだから。そう簡単には負けないわよ。何か賭けたっていいよ」
「ほほぅ。大きく出たなぁ」
　さすがにお金とかを賭けるのは不味いだろうが、そういうのは嫌いではない。面白そうだ。最近ただのオセロというのもまんねり気味だし。
「お金とか賭けるのはダメだけど…あ、そうだ。伊藤くんが勝ったら、帰りに寄り道していこう」
　彼が勝てば帰りにちょっとしたデート、ということだ。だが一は喜びかけたが、次の瞬間抜き差しならないことに気づく。これはきっと彼女なりの…罰ゲームなのだろう。彼と寄り道するのが罰ゲームというのは、一緒に寄り道できても嬉しくない。
　しかしチャンスであることに変わりはない。
「じゃあ俺が負けたら、そのときにジュースかなんか奢ろう」
「だったら『パイナップルアーミー』のコーヒー奢ってよ」
「ああ、あの喫茶店か。ＯＫ、負けたらコーヒーでもケーキでも奢ってやろう！」
「決まりね。いざ尋常に勝負よ！！」
　二人はにらみ合い、そして盤に集中した。

春香はおそらく真剣に、何手か先まで読んだ戦術を練っている。ここまで集中しているのは珍しい。そんなに自分と一緒に行くのが嫌なのか…と一は勝負を忘れてブルーになりかけるが、これは願ってもないチャンスである。勝っても負けても帰りに寄り道できるので、成り行きとはいえ上手い具合に転んだものだ。

しかし…と一はなおも悩んだ。彼が勝ったら寄り道が、春香にそんな気はないかもしれないが、デートが出来る。だが考えようによっては、負ければ喫茶店でお茶できるわけだ。彼の支払いとはいえ春香とお茶できるなら、コーヒーやケーキの一人前くらい安いものだ。罰ゲームにつけこんで、喫茶店でゆっくりお茶するのも悪くない…。

一の打算はオセロの石の白黒さながらに、勝敗の狭間を何度となくひっくり返った。

（後書き）

恋愛というジャンルから、甘い蜜月のような話を想像した方もいるかもしれません。切ないすれ違いの恋を想像した方もいるかもしれません。優しい慈愛の理想を想像した方もいるかもしれません。しかしこんな内気な駆け引きもまた、恋愛というジャンルにあっていいのではないかと筆者は思っています。

…筆者は上記のどんな恋愛もしたことはありませんがね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1239a/

春色リバース

2010年10月8日15時17分発行